

六道輪廻(二)

多田山公秘稿

六とは数ではない。

ムと發する音義(ひびき)の示すところである。

〔其の音義(ひびき)をコトタマと日本民族は傳承へて居る。〕ムとは空零で、正邪の外に存るの義で、正邪を築くの點である。

故に六道と呼ぶので、六道各界なので、各世界が六に歸結して大死を得るので、六とは大悟徹底すべき方途(みち)である。發(ひら)いて闔(と)じて窮盡(つきとうす)ので、極小の火に徹するのである。

地獄の釜の底を打ち抜くので其処は光明赫灼一圓昭昭一音琅琅たる大宇大宙(ただひかりのみ)である。

初に光存り、徹底即達頂、極大即極小(ひかりはかみなりき)であるから、六とは極(はて)が無いので、箇體たる小宇宙が其の源泉である大宇宙に到達す

る道なのである。

無(む)なので空零である。

無中心であるから一點(ひ)である。

けれども、唯に無いのではない。

唯に無いと思はば、六道輪廻で地界魔境に縛められたのである。

六は成数の外に脱出したのであるから、之れをココロと呼びて靈念思考と千変萬化するヒなのである。

此のヒを六道と呼ぶので、結べば直靈で、脱出すれば禍津毘で、共に宇宙を築きながら宇宙を破壊する神魔なるイノチなのである。

で、人の心は平常肉體外に脱出しつつ魔想魔心と化(なり)ながら又、内に歸りて魂となり直日となり又復、脱出を企てて禍津毘となりつつ往還流行寸時も止むことは無いので、結べば神解くれば日、逃ぐれば魔なのである。

小宇宙としての箇體は無間断に其の箇體自身の外に脱出そうとする心を有つて居るので、其の脱出した心が其のまま自分自

身を離れて別な箇體を築いて独立生活を営むことがある。

此の離れた心を日本では遊離諸魂(ばけみたま)と教へて居る。

術魂(ばけだま)とも云ふので、幽霊とか亡魂とか云ふのと同じで、魔境魔界の主である。

此の魔境魔界を調伏し濟度し救出するは神徳で、其の色相は綠色である。

綠色は張落榮枯を教へた色で教へたと共に事實であるので、スリカタメナスナルアマノヌホコの示言靈を指すので其の色である。

天沼矛

天沼矛の徳(すりかためなすなるあまのぬほこ)は人身の去来を教ふるのである。

来たりしところ、往くべき先目的基準・行止進退を明示するので、之れを言靈の幸と称へまつる。

スリカタメナスナルアマノヌホコ即コトタマノサチ也矣。

人間身平常見聞覺知する世界は極めて狭く、時間に制せられ空間に遮られて居るから、話をするにさへ人類中の一小部分に

過ぎない。

鳥獸草木山河大地日月星辰は目に観、或は一部の音響は聴き得ても、相互に物語ることを知らず。

空界幽闇地界黄泉の諸類とは相會ふても相知らず、相語りながら其の聲を知らぬのである。何如に狭き人間身なるか、何如に小さき世界なるかよ。

示神の憐憫たまふ御聲も聴きながら知らず、御相に抱かれながらそれとも思はぬのである。

示は特に之れを憐憫と思召給ふによりて、人の身ながら清く美しきを撰びて尊(みこと)となしたまひ、示の御聲を教へ、御相を知らしめて六道輪廻の萬類を調伏濟度救出誘導攝入せしめ給ふのである。

故に尊(みこと)の教ふところ示の道である。

世人(ひと)は此の教へに據りて悉皆の疑問を解得(さと)ることが出来るのである。

この人間身ながらの示たる尊とは、天皇にして、民人の據り頼むところである。

據り頼むところに解脱(さと)り)は存るので、我が来たりし

大宇宙の大中心たる命（みこと）の命（みことのり）の遮邇（ミカド）なれば、往くも還るもアアヒガテンジンユウアイコウ（南無阿弥陀佛）と称へ奉らば、此の土此のままの高天原にして、此の身このままの示にして尊にして天皇にてましますなり。

別名を大日靈貴尊とまうしま
つるは比咩示（ひめかみ）にて
ましますので、日本天皇の祖神
（みおやかみ）にてまします所

以（わけ）である。

高天原を治しめすは天照大御神にして又、天照皇大御神なると共に天照坐皇大御神にてましますのである。

月讀命とは月夜見・月弓・月讀命と教へられてある如く、母胎（はは）に於ける資料であるから、之れを塩土（しほつち）と稱して食國（をすくに）である。

現云ふところの國家（くに）としては、領土・財産・國民・民族・立法・司法・行政と云ふが如き一切の機構を指して名稱けにので、夜の食國とは、其れ自身としては獨立せざるものである、物資なのである。

内閣総理大臣と雖、内大臣とか掌典長とか云ふとも、悉皆、資料である、資料として天皇に奉獻らねばならぬので、奉獻りつつあるから、其の位置に居るのである、居ることができるのである。

之れを支那文字で書けば魄である。

魄は地に歸ると云つてあるのは陰なりとの意味で、月球をして人間身は其の代表と認めたの

である。

月讀命は陽示（をとこかみ）にてましますと教へられてあるのは、荒身魂にてましますとの意味で、陰即陽（めでめ）で陽即陰（めでめ）で、女（め）で芽（め）で目（め）で命（いのち）で、生死遷流で、一切（すべて）の事象（こと）で、真理（すぢみち）で、天（あめ）で地（つち）で上で下で腹で背で中心（しん）で枝葉で、君（きみ）で民（たみ）であるから天照坐皇大御神にてましますのである。

（佛教云ふところの一字金輪大日如来で、不動明王であると共に、觀自在佛にてましますのである。）

素盞男尊とは海原である。

と云ふのは、高天原を築成した暁である。

小宇宙としての箇體が、水に清め、火に明められたる結果として築き上げた樂土としての高天原である。

故に海原と云ふのは、波濤風雨の収まりし暁を挙げて人生の極樂世界を教へたのであるから山祇（やまつみ）と云ふと反對

であつて同様であること、陰と陽との如くである。

それで山祇示（やまつみのかみ）と海津見神（わたつみのかみ）であると教へられて居るのである。

此の漂浪國（ただよへるくに）を修理固成（すりかためなせ）とて天沼矛（あまのぬぼこ）賜ひたりと教へられたところの漂浪國が、修理固成の暁が海原であるところの高天原なので、之れが素盞男尊にてましますのである。

小宇宙として箇體としての高天原であるから、天鈿女尊であるところの天照大御神なのである。

之れをやマトコトバと稱へて日本精神と云ふに等しいのである。

換言すれば、日本民族が傳承へて来た高天原の御教が日本精神と呼ぶべきであつて、やマトコトバの示言靈の指示するところである。

單（ひとり）、日本民族と云はず世界人類は頭初、悉皆、天國樂園淨土等と名称は異にしても、等しく示界（かみのくに）

から示道（かみのみち）を傳承へて来たのであるから、現在の日本人のみが天孫人種だとか、天降民族だなどとは云ひ得ないのである。

之れは我々の常識が直に認むるところで、誰人（なんびと）も異議のあるべき筈がない。

それにも拘はらず、所謂國粹論者等が日本民族のみの神道なりなどと稱して自、牆壁を築くの愚を演じつつあるは聖世の痛恨事である。

高天原傳承の示道（みち）が日本精神で日本天皇の司りますます皇道なのである。

故にマニマニと稱へてフトマニとはむるは日本天皇道で、日本精神であること、一毫末だも疑ひを挿むべきところ無く、國民民族は一意専心天皇を奉戴しまつるべきのみであること亦、固より一點の疑義を容さざるところである。

マニとは玉で魂であるから、全體であると共に全體の中心である。

天皇は國家全體にてましますと同時に、國家の中心にてましますので、天皇は國の體にして

用にして、體用不二にして、不
一不三不四にして、日本にてま
しますのであるから、日本即天
皇、天皇即國體、國體即日本で
天皇とは主體即國體たる日本精
神にてましますので現津神と称
へまつる所以なのである。

國家機構として如斯である如
く、家庭としても如斯であり、
郷土としても、人類世界として
も如斯なるべきが宇宙真理の正
法であることは、宇宙構成の事
實が如斯であるから、一點の疑
義をも容るることはできぬので
ある。

宇宙構成の事實が如斯である
ことは、各人各自の身心構成が
直に其の證左である。

その人身（ひとのみ）は何如
にして造られたるか。

何れより來れるか。

何処にか往く。

日本民族傳承の日神事は直に
之れを解得（さと）らしむるの
である。

日神とは、天照皇大御神にし
て天照坐皇大御神にして天照大
御神にてましますので、人間身
は太陽球を其の代表と認めたの
であります。

人間見得る世界では、其の稜
威赫灼たること太陽を最もとす
るから、各國各民族は太陽を拜
して日神（ひのかみ）と仰いで
居る。

其の之れを偶像崇拜なりと排
撃せんとするものの出たのは、
空零に迷はされた爲で、事實を
直視することを忘れた結果であ
る。

人間相互にすら相互の禮儀は
あるものである。
無ければ人の世界は成り立た
ぬのである。

人としての身で、太陽が人間
に與へらるる程の光輝を恩恵を
與へ得られようが無い事實を見
得るならば、日夕其の恩恵に對
してだけでも感謝の誠を捧げま
つらねばならぬことは云はずと
も知らるべきではないか。

此の恩恵に感じ、恩恵を喜び
恩恵を讀へまつると共に、此の
恩恵を空費（むなし）くせざら
んとするは日神事の第一歩であ
る。

此の受けたる恩恵を回らして
人天萬類に施し、人天萬類をし
て我れと等しく日神事を行ぜし
むるは、其の用（はたらき）で

ある。

此の用を現すべく、體得する
は自、日たることを解得（さと
りえ）たので、大宇大宙悉皆、
日であると解脱した暁で、高天
原現成、天孫降臨なので、佛誕
なので、昇天で、再生で、再臨
である。

此の時、日本神道を傳へ得る
人格を築き成したと云ふので、
家庭としても、國家としても、
完成の暁で、神國であり、神國
である。

其の之れを成すに至った主動
者は、國家としての天皇で、家
庭としては戸主で、箇人として
は根本魂である。

根本魂を直日（ひと）と日本
の古典に記載せてあるのは、日
であるとの教である。

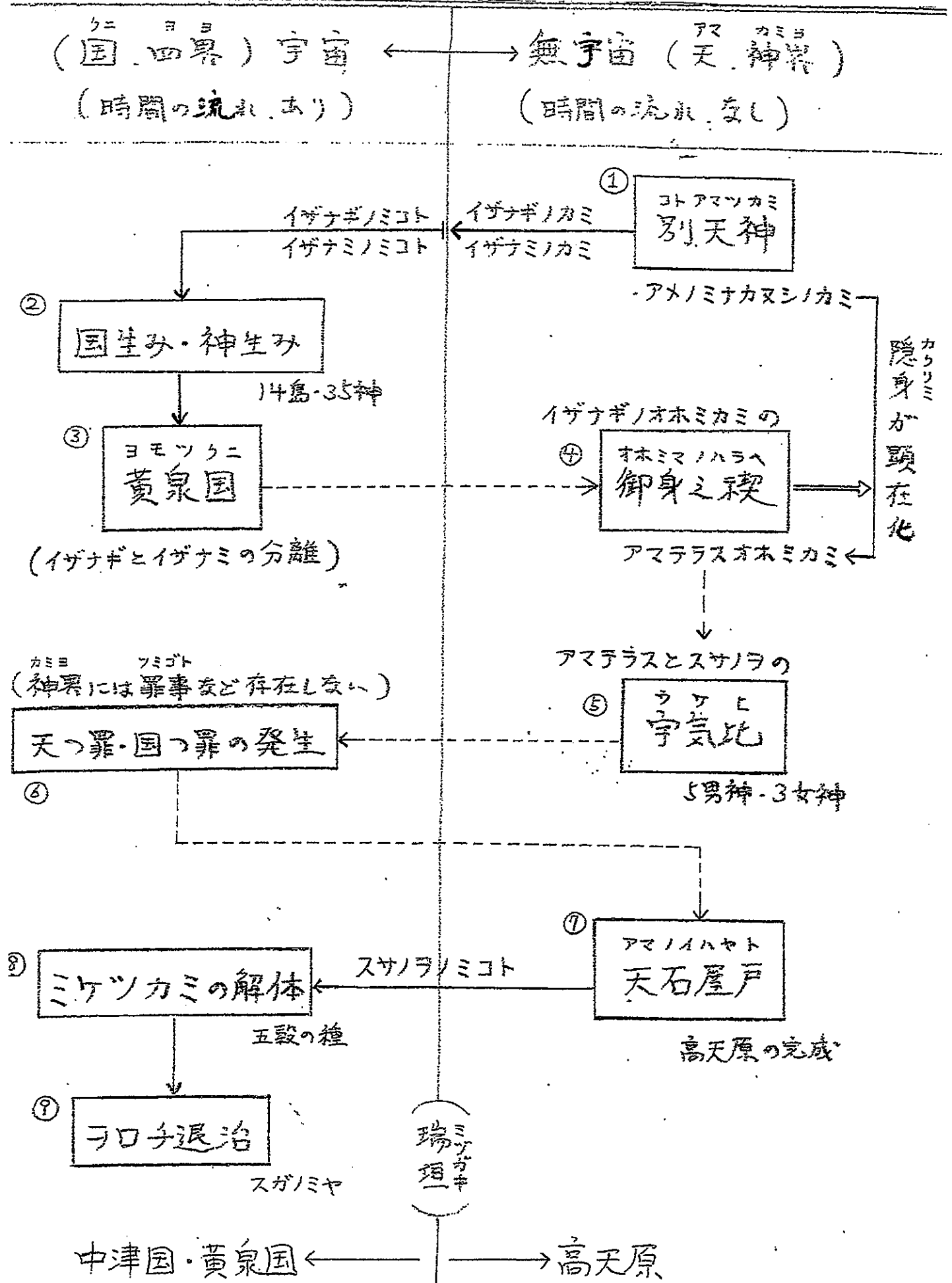
而して、日止（ひと）とは日
の止まり留まれる肉體身である
との義で、全身心を日たらしめ
日たることを解得りたる時は、
之れを神人である、神直日であ
ると古老の傳承へ來たりしところ
である。

其の之れを得る方図は唯正、
惟誠あるのみである。

正誠正義にして神國は現成す

るのである。

神人は産出せらるるのである。
神人出生の暁、日神事を分掌
しまつることを得るは、示の宇
氣比に依つてのみ行ぜらるると
ころであるから、之れを神髓（か
みながらのひ）と稱へ、カミノ
マニマニカミナガラと傳承へて
來たのは日本神道の示言靈であ
る。



虹」と解したが、いづれにもわかに従いがたい。

一 海水。

二 今いうコロコロの擬声語。

三 攪き鳴らして。書紀には「画_ニ滄海_一而」とある。

四 自擬島でひとりでに就_ニて出来た島の意。この島の所在については諸説があつて明らかでない。

五 柱を見定めて立てる意。書紀に「化_ニ作_一八守之殿_一、又化_ニ作_一天柱_一」とあるから、多分八尋とは別に屋外に立てられたものであらう。

六 大きな家屋。ここは新婚のための婚舎。

七 妻。

八 だんだん出来上つて行つて結局。

九 女陰。書紀に「雌元_ニ処_一」。

一〇 男根。書紀に「雄元_ニ処_一」。

一一 「陽元」とある。

一二 さし入れふさいでの意。交接すること。

一三 そうです、それがよいでしょう。

一四 「しく」は過去の助動詞「き」の連体形「し」。

一五 副詞「く」の「く」語尾を添えたもの。続紀宣

一六 第十三詔に「朕に宣りたまひしく」と宣りた

一七 ひし大命を」とある。金光明最勝王經の古点

一八 照。

一九 婚姻の儀礼として柱を廻る習俗があつたか

二〇 うかは明らかでないが、何かの呪的宗教的儀

二一 として人々が柱を廻る習俗があつたのではあ

二二 まいか。

二三 「みと」は御所で、ここでは婚姻の場所、

二四 まぐはひ」は目合から転じた交接の意。

上の件の國之常立神以下、伊邪那美神以前を、并せて神世七代と稱ふ。上の二柱の獨神は、各一代と云ふ。次に雙へる十神は、各二神を合せて一代と云ふ。

是に天つ神諸の命以ちて、伊邪那岐命、伊邪那美命、二柱の神に、「是の多

陀用弊流國を修め理り固め成せ。」と詔りて、天の沼矛を賜ひて、言依さし賜

ひき。故、二柱の神、天の浮橋に立たし立を訓みてタシと云ふ。て、其の沼矛を指し下ろして

畫きたまへば、鹽許々袁々呂々邇音を以て。畫き鳴し鳴を訓みてナシと云ふ。て引き上げたたま

ふ時、其の矛の末より垂り落つる鹽、累なり積もりて島と成りき。是れ淤能基

呂島なり。淤より以下の四字は音を以て。

其の島に天降り坐して、天の御柱を見立て、八尋殿を見立てたまひき。是に其

の妹伊邪那美命に問曰ひたまはく、「汝が身は如何か成れる。」ととひたまへば、

「吾が身は、成り成りて成り合はざる處一處あり。」と答白へたまひき。爾

に伊邪那岐命詔りたまはく、「我が身は、成り成りて成り餘れる處一處あり。

故、此の吾が身の成り餘れる處を以ちて、汝が身の成り合はざる處に刺し塞ぎ

て、國土を生み成さむと以爲ふ。生むこと奈何。」とのりたまへば、生を訓みてウム

と云ふ。下は此に效へ。伊邪那美命、「然善けむ。」と答曰へたまひき。爾に伊邪那岐命詔りたまひ

しく、「然らば吾と汝と是の天の御柱を行き廻り逢ひて、美斗能麻具波比

字は音

「隠された 瑞垣」の発見

古事記の冒頭では、まず五柱の神名を挙げた後に、それを『別天つ神』と説明しており、続けて十二柱の神名を列挙してからそれを『併せて神世七代と称ふ』と説明している。

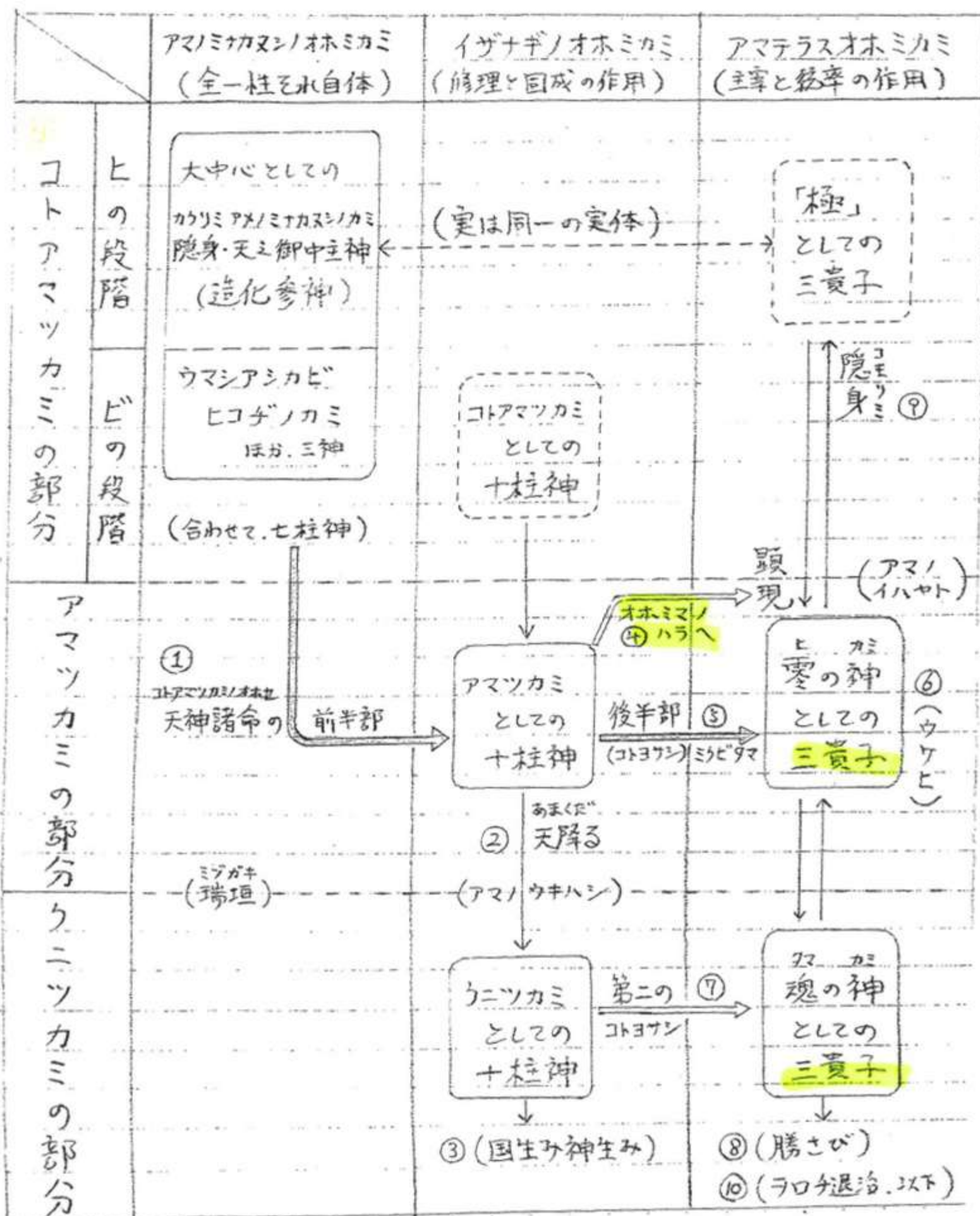
「別天つ神」という言葉の意味から考えて、その直後に名を挙げられている十二柱の神々はみな、当然に(普通の)「天つ神」である。『併せて』と一括されている以上、順番としては末席となる「伊邪那岐神、伊邪那美神」も、もちろんその例外ではない。

ところが、次の文章では唐突に神名の語尾が変わり、
『是に天つ神の諸命以て、伊邪那岐命、伊邪那美命、二柱の神に(中略)言依さし賜ひま』と書かれている。だが、よくよく考えると、『天つ神の諸命以て』と言っている以上、この『伊邪那岐命、伊邪那美命』自身は当然に「天つ神」ではない。「別天つ神」でもなく「天つ神」でもないのだから、この神名は当然に『「国つ神」としての「イザナギ・イザナミ」』であると解釈すべきである。

即ち、ここには「瑞垣」(ミヅガキ (アマ) (ウニ)) (無宇宙と宇宙との境界) の存在が言外に暗示されているのである。

オホミカミ コトアマツカミノオホセ
図表：大御神と天神諸命

7



ヒ 雲の神	直 日		ヒ 雲の神と しての仮へ	⇒ 櫛の雄柱 一つ先の 火神事
瑞垣			↑伊 邪 神 那 美 命 の ま す	
タ 魂の神		タ 魂の神と しての仮へ	神 避 り ま す	⇒ 八種雷 の秘事
玉垣			↑天 若 比 古 の 死	
ミ 身の神		猿 田 毘 古 神 の 導き	⇒ 高木神の 天返の 神事	
中垣				
ミタ 魂の神	人 間 的 顕 身 魂 の 分 度			神 習 ひ 習 ふ
荒垣				▽
ヒ 人の神				人間世界 の ミクマツリ

古事記の記載は、一見まことに複雑ではあるが、

第一章は、別天神の神界記であるから、之を數理觀から言へば、最初に一を教へ、その一は、三から成り立つて居り、その三は、經と緯との二であるからとて、時間と空間とを現し來る本體としての零を知らしめたのである。

第二章は、宇宙成壞の垂示であるから、時間と空間との二つが一つになつては十で、その十が別れては、破壊と呼ぶところの死で、その死も結び來れば、建設と呼ぶところの生で、成で、此のやうな變化は、二、三、四、五、六、七、八、九と稱するので、その成り餘れる三、五、七、九の四と、成り合はざる、二、四、六、八の四との合ひては、八である。此の八に依つて、宇宙の萬有は制御せられ整理せられて平衡を保つことが出来るのである。

第三章は、高天原築成の祕儀である。之をミソギと呼んで、三十神界の生滅起伏である。

第四章は、罪惡觀で、數の分散である。

第五章は、高天原開闢記で、三十六の聚散離合である。

第六章は、罪惡觀の第二で、復活の垂示である。五の百倍と、百の百倍と、千の千倍との九である。と云ふと、ひどく普通學には遠ざかるが、神界の事理が複雑なのであるから、祖神垂示の數理觀は懇切丁寧であつても、之を理解することは、まことに容易ではない。で、以下之を省略することとしよう。

第七章は、中心觀で、箇體成立の原理に立脚して、國家觀を教へ、特に日本建國の精神を明にされたのである。

第八章は、綿津見宮と日少宮、産土神と鎮守神との關係を説示したのであり、

第九章は、死生解脱の祕を教へ、

第十章は、宇斗の神言靈を垂示されたのである。此の神言靈は、一言の萬城主の主ところで、古事記は之を下つ巻に記されたが、事實は勿論神代紀である。

神の代の、神の祕事。人の身の伏し仰ぎつつ。今日もかも、國平けく。明日もかも、うら安くこそ。内外隔てず。

靜寧和平の神國樂園を築くには、唯是、爾が身を爾自、倭の青垣東の山の上に齋き祭ればよいのである。

産土神の神德^{ミハクラキ}は、そのまゝ「ハハ」と成り鎮守神の神德は、そのまゝ「チチ」となる。合せては「ミオヤ」と呼ぶ。爾^ナが身は、固より「チチ」と「ハハ」との一つ身なれば、「ミオヤ」である。

ちち、はは、みおや、みおや。なべてのひとびと。わが、さきのよの、ちち、はは、みおや、みおや、われに、ゆかりある、なべての、みみたま。みな、ともに、さとり、さとる。さとり、さとれば、あまねく、ひとつなり。ああひがてんじんゆうあいこう。と、たたへまつるなり。

日本の古典は、之を傳へて、

2019.10.22. (火)

幸265頁の説明

第一章

古事記 51頁 「別天神五柱」

(実際には 七柱目までがコアマツカミ。
雲とニニミについて述べたもの。)

第二章

" 「神世七代」

(十柱神の構成について述べたもの。)

第三章

古事記 53～61頁 「伊邪那岐命と伊邪那美命」
1～4.

(国生み・神生みの神話は、
高天原の築成を表現したもの。)

第四章

古事記 61～67頁 「同」 5-6.

(ヨモツクニの神話は、罪について述べたもの。)

第五章

古事記 69～91頁 (「同」 7～9
「天照大御神と須佐之男命」 全)

(7カマハラの神話は、
36. の集散離合について述べたもの。)

第六章

古事記 91～111頁 「大国主神」 全.

(いわゆる火雲神話は、再び罪について
また、復活について述べたもの。)

第七章 古事記 111～135. (「葦原中国の平定」 全
「通々其命」 全)

(天孫降臨神話は、中心と外郭について、
箇条や国家の成立の原理について、述べたもの。)

第八章 古事記 135～147 「火遠理命」 全 (以上、
上巻おわり)

(山幸彦の神話は、綿津見宮が無宇宙のたとい
であることなどについて述べたもの。)

第九章 (149-161) (中巻)

・死生解脱の秘 (神武東征の伝説などが
これに相当か?)

第十章 (315-317頁) (下巻)

・神言霊 (「雄略天皇」と葛城山の伝説が
これに相当か??)

高天原と零神と「ヒメの秘事」

これを「ヒメ」と言う

(「メ」、母胎、イノチ)

「^{イハサカ}髻^{タカマノハラ}境としての高天原」

アマテラススメオホミカミ
天照皇大御神 (天御中主大神) → ^{ヒノカミ}○神

「極大極小のヒ」

(「ヒ」、「ヒメ」)

「大宇宙としての高天原」の主神 ↓ 日神 ^{ヒノカミ}

即ち天照大御神 (天之御中主神)

↓ 高天原を治らす

大宇宙の大中心

宇宙の中心とは別、箇体の中心を築き成すその元となる一点のこと

「母胎としての高天原」における資料

即ち月読命 (天照坐皇大御神)

↓ 夜食国を治らす

月球で象徴
(天で地で魂)

「小宇宙(箇体)としての高天原」

即ち素戔嗚尊

(天鈿女尊としての天照大御神)

↓ 海原を治らす

山祇神と海津見
(地で魂)

神 名	内 容	別 名
アマテラススメオホミカミ 天照皇大御神 (境地 ○ ヒ)	イハサカ 磐境としての高天原 母胎	アマノミナカヌシノオホミカミ オオヒシルメムチノミコト
アマテラスオホミカミ 天照大御神 (実体 ⊙ ヒカリ)	(大宇宙としての) タカマノハラ 高天原の主神	カクリミ コトアマツカミ アメノミオヤ 隠身、別天神、天祖 アメノミナカヌシノカミ 造化三神、二柱御祖神 三貴子 他多数
ツキヨミノミコト 月読命 (活用 ⊕ ヒトツ)	その母胎における資料 およびその活用	アマテラシマシマススメオホミカミ 天照坐皇大御神
スサノヲノミコト 素盞男尊 (再び実体 ⊙)	(小宇宙としての) 箇体としての高天原	アメノウズメノミコト (天鈿女尊としての) 天照大御神

大宇宙に遍満する「零」には、以下の三通りの性質が
内在している。

1. ^ヒ○ ^{さかひ}境地 (外郭、位置、^{ヒカ}①なる実在、を悟證すべき境地)

この「境地」を ^{アマノミナカヌシノオホミカミ}天御中主大御神 と称する。

(また、^{アマテラススナオホミカミ}天照皇大御神 ととも)

2. ^{ヒカリ}○ ^{ありてあるもの}実在 (中心と外郭とから成る統一性)

この「実在」を ^{アマテラスオホミカミ}天照大御神 と称する。

3. ^{ヒトツ}⊕ ^{はたらき}活用 (ミコウミ ^{スリカタメナス}修理固成 の作用)

この「活用」を ^{アマテラシマシマススナオホミカミ}天照坐皇大御神 と称する。

→ 以上は、共に「火」で「零」で「無なる有」で、
「修理固成の天沼矛」である。

故に今假に大宇宙の大中心と呼ばん。

大宇宙の大中心とは一圓にして一音なれば、宇宙にあらず、宇宙の中心にもあらずして、宇宙を築き、宇宙の中心を成すなる一點にして「ヒ」なると共に「メ」なるなり。
之れを「ヒメ」の祕事となすなり。

「メ」とは母胎にして、女陰にして、国土にして、家にして、聲境にして、神命なれば「イノチ」なり。

目なり、芽なり、女なり、命（いのち）なり、生死遷流なるなり。

故に「メ」とは「アマテラススメオホミカミ」にして、「ヒメ」とは「アマテラスオホミカミ」にてましますなり。

之れを「イスズヒメ」と称へまつるは「ヒメカミワザ」の「ヒメコトタマ」にして、「カミノコトタマ」なる極大極小の「ヒ」な

るなり。

「ヒメ」にして「ヒ」なるなり。

故に「イザナギノミコトイザナミノミコトフタハシラノカミ」と称へまつれば「大宇宙の大中心としてのカミ」なりとの義にして、「イザナギイザナミフタハシラノカミ」と称ふる時は「善惡美醜正邪曲直判別の神徳」との義にして、「イザナギノカミ」と称へまつるは「神界築成の神徳」との義なるなり。

其の然るは「カミノコトタマ」の然るなり。

人間造作の名称ならざるは固よりにして、人間歴史上の人身の身魂としての神徳なりとの義にもあらざること、また固よりなり。

葛城野一書

されど、人間歴史上の人身としての身魂が「カミノコトタマ」としての神徳を顕彰すること、また固より當然の事理なるなり。さればとて、某甲の死後、其の身魂が「イザナギノカミ」にして、或は「アマテラスオホミカミ」にして、亦は「カツラギヌシノカミ」にして、又或は「ニギノミコト」にてましますと

云ふにはあらざるなり。

人身としての身魂が大宇宙の大中心に歸入したる時は、生死を隔てずして直に「カミ」たるの御徳を顕彰するが故に、「イザナギノカミ」たり、「アマテラスシマススメオホミカミ」たり、「アマテラスオホミカミ」たり、「アメノミナカヌシノカミ」たり、「カツラギヌシノカミ」たり、「ニギノミコト」たること、一音琅琅として邊際無く一圓晃耀として極無極なるなり。

極大極小の火

であるから「カムロギ」であり「カムロミ」であり「カムルミカムルギ」である。
名詞 動詞
駢言でもあり活用語でもあり其の時と其の人と其の処と其の祭典の目的とに相應して變化するのである。

天之御中主神と称へまつるのみでは一切を包括し給ふ御名であるが其の御活用作解を仰げば高御産巢日神神産巢日神にてましますからそれを祖神としては神漏岐神漏美とも伊邪那岐伊邪那美とも称へて皇祖で皇親で「皇親大倭須米良岐美」で「吾大伎美」で「伎美」にてましますのである。之を支那人は陰陽と呼びまた乾坤とも称へ近く身に取りては男女と云つて居る。日本人は敬虔の念から「加徴」と称へ支那人は不可測だからとて「神」と呼び陰陽だと云つたまでの異別なので共に「祖」で「親」で「ミオヤ」で「オヤ」である。

その「ミオヤ」の「ミイノチ」の変幻出没が人であり物であるからとて「天命」とか「命」とか書き天神の詔命なればとて「ミコト」と称へ「ミコトノリ」と仰ぎ「オホセ」なりと畏みまつるのである。

此の御声として拝む神漏岐神漏美の妙用を高天原にては「男建」と呼び「雄詔」とも称へて大宇大宙の勅命則作解

別天神の命で古事記に所云の「天神諸命」である。そこで神漏岐神漏美として男建雄詔ぶ大宇宙の神勅のままに皇親の神には百八百万と在る限りの神を神ながらにお集め遊ばされてその神道を神の遍爾遍爾神頭カミし各自各自の神性を發揮させようとして神ながらにお譲り遊ばされお諭し遊ばされお教へ遊ばされお導き遊ばされた。その結果として八百万神は皆悉宇宙の事理を明にしたのである。之を人間的に観て現今の詞で言ふならば「正しき与論」を作られたので茲に其の真理のままなる国を建てさせ給ふとて先其の中心の超絶性をお示し遊ばされたのである。則国家機構の中心は唯一超絶神にてましますし日本民族は之を皇御孫之命と讀へまつり仰ぎまつるのである。

神名の活用と「親」

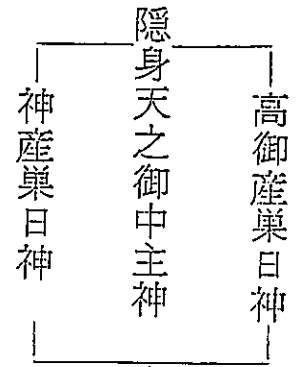
国各地の古典に通じて認めらるるところである。

宇宙万有産出の祖神は對待を絶して居ること固よりであるから時間に拘はらず空間に限られざる唯一超絶の神にてましますのである。それで古事記は「隱身」とか「独神」とか「別天神」とか記し、極大で極小で極で無極で「零」であることを明にしてある。零とは大平等であるが人は其の中に自己なる一点を認めて其処に「カミ」を拝む。故に此の神は既に零ではない。隱身でも独神でも別天神でもない。相對の妙用妙象を現はされたのである。ではを御声として拝めば「カムロギ・カムロミ」であり御象として仰げば「伊邪那岐・伊邪那美」であり数として算めば「〇十」で⊕で十字架で十である。

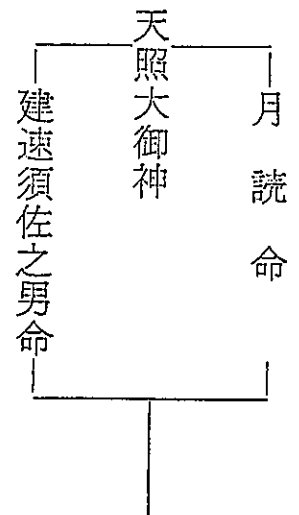
此の「カミ」とは(一)であると共に(二)でまた(三)で(五)で(十)で百千万無量である。(一)としては天之御中主神で二としては高御産巢日神神産巢日神で(三)としては天之御中主神高御産巢日神神産巢日神で(五)としては天之御中主神高御産日神神産巢日神宇麻志阿斯訶備比古遲神天之常立神で(十)としては宇比地邇神須比智邇神角杵神活杵神意富斗能地神大斗乃弁神淤母陀琉神阿夜訶志古泥神伊邪那岐神伊邪那美神で百千万無量としては百八百万天津神国津神と稱へまつることを古事記は伝へてある。なほ日本書紀旧事本紀祝詞式等と対読すれば一層明瞭になるし他国他民族の伝へた古典をも併せて見るならば更に良いのであるが今は成るべく煩を避けて古事記だけに止めたい。

さてこの大宇宙たる高天原は超絶零界であるがその御活用を仰ぎまつれば神漏岐・神漏美として万有を発現するので之を皇親と讀へまつる。その皇親とは「スメムツ」であり「スメラガムツ」であり「スメラガムツミマスナル」であり「スメミオヤ」である。「スメミオヤ」としては皇祖である。けれども皇祖とは等しくして僅に異なる。「祖」とは「ミオヤ」であるが「親」は更にその御活用を示して相和ぎ相親しみ相睦み相誘ひ相合ひ相交はるの義

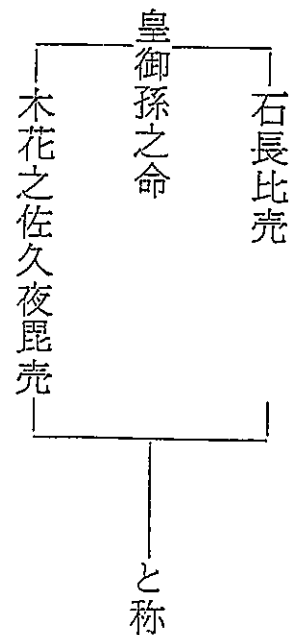
はてしと神の零ヒ



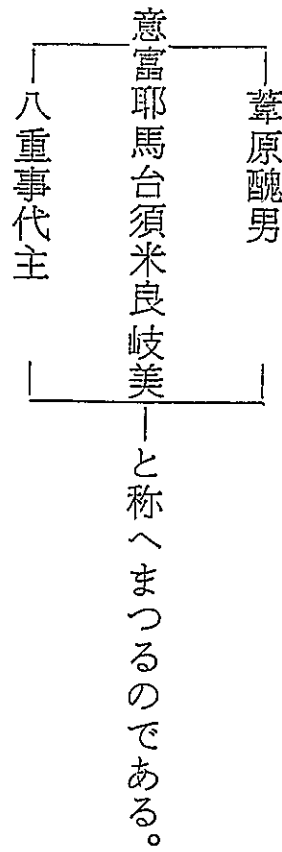
はてしと神の魂タマ



はてしと神の身ミ



へまつるが如く経に次序を逐ふて其の御名を異にされるが与に一貫したる「カミ」にてまします。更に人類世界の神としては



ところがその国は本来神魔包括の○の神であるから時あつては神とも成り魔とも変るので人間の波瀾が其処に起る。皇御孫之命は天降りまして人間世界を統治統率し給ふ為に人間身として君臨せさせ給ふので人は茲に五官的に拝みまつることの出来る「神」即「中心」を仰ぎ得たのである。

阿那畏。

日本語にては此の「神」を「オホヤマトスメラギミ」と称へまつりて「葦原醜男」「八重事代主」の妙用を御現はしますことと拝承しまつる。

人間世界の波瀾曲折は隱身天之御中主神が神魔の軀にてまします為の活用変化なのである。之を数として見れ

得るには、「禊行事」に熟せねばならず、「神の宇氣毘」に依らねばならず、単なる言説を忘れねばならぬから、其の人を得て伝ふるよりほかはない。が、出来るだけ本文の言霊をその範圍で判明するやうに努めよう。さて、「高天原爾神留坐」とある。その「高天原」とは、此の「天」は「アマ」だと古事記の訓ませであるのをはじめとして、世間では、「タカマガハラ」などとも訛つて居る。その読み方よりも、その解説はなほ更に雑多なものが行はれて居る。けれども、次ぎの文を見れば此の読み方も自ら判明するのである。

「皇親。神漏岐・神漏美乃命以_ミ」

「皇親」は、古来「スメムツ」とか「スメラガムツ」とか読んで居る。これは、「スメミオヤ」であり、「ミオヤ」で「オヤ」で、「隱身ヒノカミ」としての「神祖たる皇親」であつて、人間的の親子關係ではないから、「オヤ」「ミオヤ」「スメミオヤ」を妙用ミハタラキの方面から「スメムツ」とも「スメラガムツ」とも読み、更に「スメラガムツミマスナル」と読んで、「カムロギ・カムロミ」の「命オホセ」と応ずべきことを明にしたのである。従つて、「皇祖」とは書かずに「皇親」と書く。それは、「スメラガムツミマスナル」「カムロギ・カムロミ」の「カムツマリイマシマス」「タカマノハラ」であるから、「皇親スメミオヤ」は即「神祖ミオヤ」ではあつても、時間を認めての過去の存在と云ふのではなく過今来に弥り四維十表を超えて常時不斷に顯靈二貫の活用として都べてを産み出すので、「祖」では誤解され易いために「親」とされたのである。則、「スメラガムツミマスナル」は、「カムロギ・カムロミ」を説明したものとなる。

時間と空間とを超えて大宇宙の御活用ミハタラキを觀めまづれば「カムロギ・カムロミ」と称へまつるところの「オヤ」で、「スメラ」で、「ミオヤ」で、「スメミオヤ」で「スメラガムツミマスナル」で、躰の上から云へば「スメミ

オヤ、カムロギ・カムロミ」である。さうして、「スメミオヤ、カムロギ・カムロミ」の「神留」と充滿実塞し鎮坐するところの「高天原」である。

「鎮坐」と云へば、空間が存るやうに聞こえようが、実は大宇宙の一切が「カムロギ・カムロミ」と雄走^ヲ雄^ヲ詰^コぶので、「神留」と書いてはあるが、此の漢字に拘泥して「神」と「留」と二つの活きと思つては間違ひになる。古来此の二字を「カムツマリ」と読み、神^{カムシヅマ}鎮^{ツマ}るの意味も含まれて居ると説明されてある。それで、「カムツマリ」の語義を検討して見るに、「カム」と「ツマリ」と二語の熟したのではなく、「カムツマリ」なる五音一語である。その五音各の意義は、赫赫烈烈の「カ」、制御の「ム」、出でまた出づるの「ツ」、円成の「マ」、改廢整理の「リ」で、総べて云へば、強固に制御せられ、善美正明の妙相妙用を示現され、完全円満なる統一脉を築き成したと云ふのである。で、「高天原」と「神留」とは相對ではなく、「神留」に依つて「高天原」が出来て居るとの意である。「高天原」は則「神留」で、それは「皇親」で、「神漏岐・神漏美」で、両儀なる「太極」で、別の詞では、一音響と云ひ一円相とも呼ぶところの「一^{ヒトツ}」である。

そのやうに、大宇宙なる「高天原」は「一^{ヒトツ}」である。と共に、私どもの認め得る万有は都べて「一^{ヒトツ}」である。その「一」なるものが「一」の内に在る。古典には、その「一」なる「タカマノハラ」を亦、「イクムスヒ・タルムスヒ・タマツメムスヒ」と呼び、「一二三」と数へ、三が一を産み、一がまた三だとの意味を伝えてある。之は、日本民族伝承するところの「神数觀」なので、窮極に於ける「数ノ成立」は、極大としても極小としても、如此にして「零ナル一」と呼ばるることを教へられたのである。その象を描けば「○○◎」である。大宇宙としても小宇宙としても、一切合切に亘つて在るものの都べては、「高天原」としての○と◎とが◎として「カ

ムツマリ」又「カムシヅマリ」ましますので、

「神^{カムシヅマリ}鎮」の意味も有ると云ふのである。

そのやうに、「有^{モノ}」と云ふ「有^{モノ}」は、その未「有^{モノ}ヲ成サザル零」のそのままに都べて「中心ト外廓ト」から成り立つて居る。之れが天地の実相で真理であるから、人間相互の結合も勿論然うでなければならぬ。従つて、「建国ノ精神」乃至

「国家ノ機構」も、此の外には有りやうが無い。

さてその「ムツミマス」とは、相和ぎ相牽き相合ふの意で、則、男性と女性との両性・陰と陽と・天と地との相互活用である。詞としては「ヒ」と「フ」とで、数としては「一」と「二」とで、象^{スガタカマデ}・図としては「・」と「○」とである。「ヒ、一、・」は「カムロギ」と称へ、「フ、二、○」は「カムロミ」と称へ、相合ふては「ミ」と呼び、「三」と算へ、「◎」と画くので、「天^{アメノミコヤ}祖」と呼ぶところの「皇親・皇祖」である。その「ムツミマス」なる神性は「カムロギ・カムロミ」であるが、やがて、その神性の発き出でて旋転活躍の速度を増す時は、相互に其の位置を破りて相結合するに至る。其の結合するをば「カムルミ・カムルギ」と呼ぶ。それで、産^{ムスビ}霊産魂の妙用^{ミタラキ}を「カムルミ・カムルギ・カムロギ・カムロミ」と称ふれども、御神名としては「カムロギノ命・カムロミノ命」と称へまつる。世俗に、御活用としては「カムロギ・カムロミ」で、御神名としては「カムルギノ命・カムルミノ命」と称ふるのだと云ふのは、音義を知らぬ為の誤解である。「カムルギ・カムルミ」の音義は、「ムスビムズブ」活動妙用なので駄言ではない。

「皇親」は即「神漏岐・神漏美」であり、「高天原」は即「神留」である。それで、「皇^{スメラガムツミマスナル}親^{カミロギ}・神^{カム}漏岐・神

漏美^{ロミ}」は、「高天原^{タカマノハラ}爾神^{ニカムツマリイマシマス}留坐^{カミナガラ}」のであるから、「惟神^{カミナガラ}嚙ミ嚙ミ組ミ組ミ結ビ結ビ蒸シ蒸ス」御活用として「神

留、神漏岐・神漏美」とある三字の「神」は、皆共に「カム」と読み、「神留坐」をば、「カムツマリ」の下に

「イ」の一音を加へ、「マシマス」と重く確実に強固に云ひ据うるのである。さうして、其の「皇^{スメラガムツミマスナル} 親^{カミ}。神

漏岐^{ロギ}・神漏美^{カムロミ}乃^ノ」神^{カムツマリイマシマス}留^{タカマノハラ}坐^{タカマノハラ}」であるから、「高天原^{タカマノハラ}」とは、産靈^{ムスビムスビ}産魂^{ウミナス}生産^{ヤド}「胎^{ヤド}」を讚美した詞で、

日本書紀・旧事本紀共に「天成地定、高天原現成。神生其中」と伝へてある。それで、之は「タカマノハラ」と読まねばならず、その「タカマノハラ」とは、美しく整理せられ堅固に築き成された浄地であることがわかる。

「タカマノハラ」の音義は、高隆堅固充滿実塞の「タ」、赫赫烈烈の「カ」、円満具足の「マ」、胎の「ノ」、派生の「ハ」、随従親愛收納の「ラ」で、六音共に皆悉く「ミタマ」の義である。それで、此の「タカマノハラ」と云ふ詞の本義は、「充ち満ちて光り耀ける沃土浄地で、美を尽し、善を尽したる境地で」、それは亦唯單に「ハラ」でもある。「ハラ」の一語に高天原の全語義が尽されて居る。「ハラ」とは、腹で、原で、産出者で、別の詞では「ノ」である。つまり、「ノ」の一語にも高天原の全語義が含まれて居るのである。「ノ」とは、野で、篋で、野としては、産み出す境地で、篋としては、助けて長ぜしむるもので、それ自牖としての独立牖は無いが、之無ければ何物も産出し育成さるることは無いのである。

さて、此のやうな訳で、「ハラ」は「ノ」で、「ノ」はまた「タカマ」である。何れも共に足り満ちて照り耀ける○^ヒで、未、宇宙を築かざる零海^{ヒノウミ}である。同一意義の詞を重ねて一語としたのは、其の意味を強くしたのである。さうして此の「タカマノハラ」を更に、天^{アマ}とも、海^{アマ}とも大虚空^{オホミソラ}とも、虚中^{オホミソラ}とも、虚天^{オホミソラ}とも、女^{アマ}とも天地初発^{アマ}とも伝へてある。で、「タカマノハラ」は即「アマ」で、「オホミソラ」である。客観しては、「狭霧^{サギリ}」で、浄土

とか天国とか呼ぶに等しく、主観しては、「天忍穗耳命」と称へまつる。亦名は、「稜威三柱神」にてまします。

其のやうに、「高天原爾」「神留坐」「皇親」

「神漏岐・神漏美乃命以互」「八百万神等乎」とあるの

を言ひ換へると、「スメラガムツミマスナル」「ミオヤノカミ」「ミオヤ」「オヤ」と称ふる「加微」は、即、「陰

陽」で、「天地」で、「経緯」で、「――」



「――」であるところの「十」で、その「十」と結び結ぶ

「隱身」。その「隱身」の「カムロギ・カムロミ」としての「ヒメコトタマ」を仰ぎ、「ヒメコトタマ」のまにま

に、「八百万神等」を「カミナガラ、カミノマニマニ、集へ給ふ」のである。それ故に、

「神集集賜比」「神議議賜比」は、「カムツドヘツドヘタマヒ」と読み、「カムハカリハカリタマヒテ」と読む。

此の「カムハカリハカリタマフ」は疑義を相談するのではない。中心たり根本たる「神」には固より疑義は無いのである。けれども、外廓たり枝葉たる八百万神は之を知らぬから、忘れて居るから、中心より外廓に向つて、根幹より枝葉に対して、疑ひ無からしむべく八百万神の議を開陳せしむるものである。之を、人間的に云へば、直ぐ正しく明く美しく誠に善き与論を作るのである。さうして、「神命」を明にし、その神命に応へまつる。之が、「カムロギ・カムロミ」なる「天神諸命」の「カミナガラ、神ノ国ヲ築キ成ス憲法」である所以である。此の「神国ノ憲法」は、

「我皇御孫之命」「豊葦原乃水穗之国乎」「安国斗平久知所食斗」拝承しまつるのである。

「アガ」の「ア」は親しみ睦む意。「吾」であり、「畔」である。その「ア」の凝りて赫灼と照り耀ける身なりとの意にて「アガ」と云ふ。

人皆は名を異にして我在りと相互にぞ知る。神の宇氣比呂。

で、人が五官的に表から見れば、名を異にして相互の存在を認めて居るが、五官を捨てて裏から見れば、一円平等の「○」である。その「ア」としての中心と仰ぎまつるなる「我皇御孫之命」は、「豊葦原・水穗之国」と呼ばれる人類世界を「カムロギ・カムロミ」と親しみ睦み和ぎながら強く堅く制御統一して逸脱せしむることなく、平和に安楽に喜び満ちたる生を、天地と共に享けよ、享けさせよ。「聞コシ食セ」。「嚙ミ嚼ミ組ミ組ミ」「組織し制御し主宰し統一して円満具足の」「統一魂神」たる実を明にせよ。と、

コトヨサシマツリ
「事依志奉伎」
コトヨサシタマヒヤ

「コト」は事であり言であり命せごとで、さうして、「宇宙の大道」で、単なる命令とか希望を述べるとか依託するとか云ふのではない。勿論、強制するのでも要求するのでもない。ましてや、予言などとはまるで縁の無いことである。「是クアルベクシテ是クアル神ノ道」である。と言ふのは、「宇宙」即「箇躰」即「統一躰」。本来の筋道が然うなので、その筋道のままに、人の世人の国は成立し統治せらるべきものである。と命せられたので、治国の原理は、修身、齊家と等しく○であると教へられて、「中心ノ麻遑麻遑、外廓ノ機能ヲ發揮スル」のである。

中心は、「超絶ノ実在」として全躰を主宰し統率して居るのだから、その外廓を觀れば、そこにそのまま、中心の「神性」をうかがひまつらるのである。彼の相者が、一指頭を見ただけで、その全身心の正邪曲直善惡美

未来324頁より

(緯対 — 神界 ^{カミヨ} (空間) } 神代
経対 — 神代 ^{カミヨ} (時間)

この「界」と「代」は当て字

大切なのは、「カミヨ」というコトワマ。(無宇宙)

^{カミヨ} ^{カミ}「神代の神」は、「無宇宙の^{ヒノカミ}零の神」の意味。

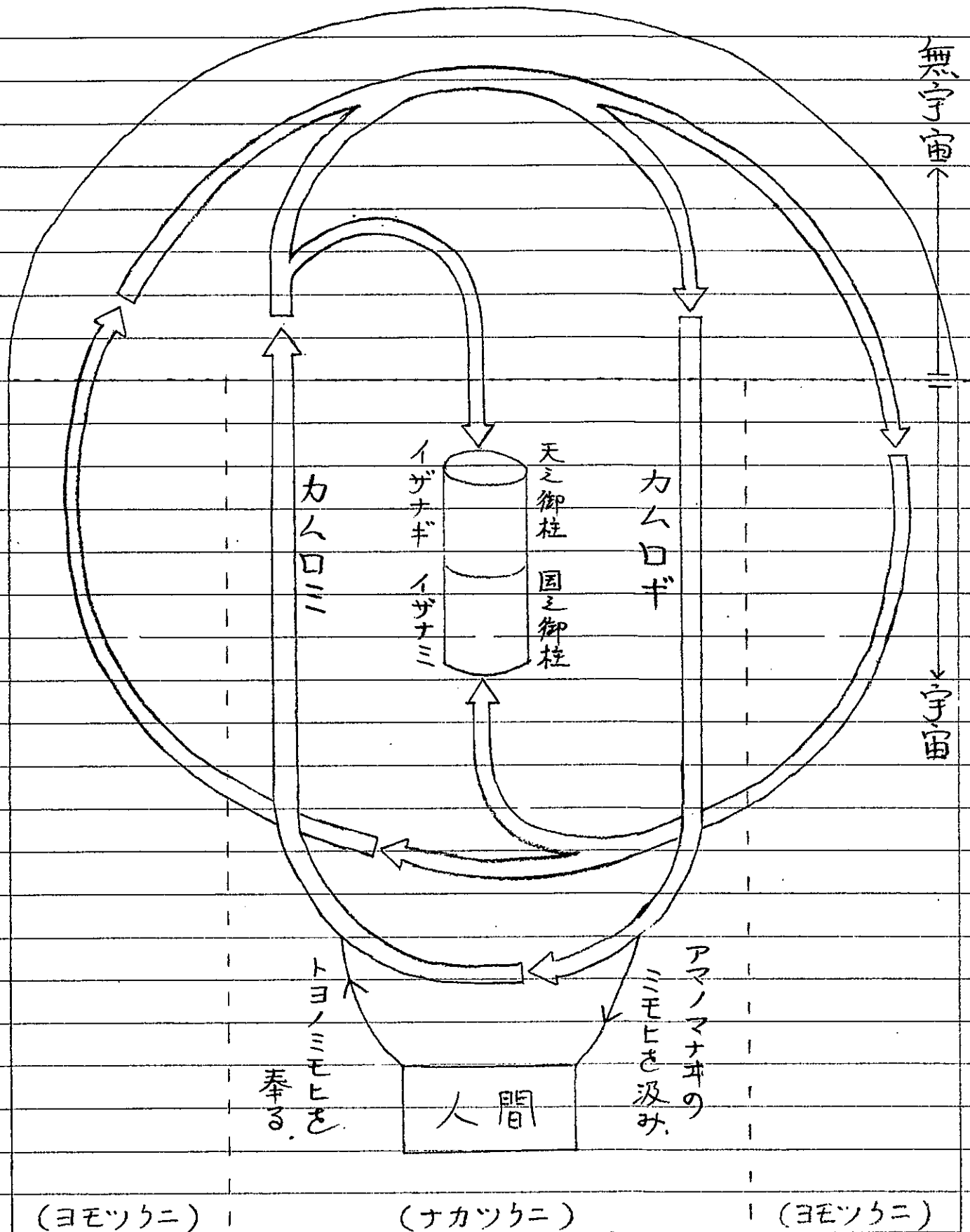
得るには、「禊行事」に熟せねばならず、「神の宇氣毘」に依らねばならず、単なる言説を忘れねばならぬから、其の人を得て伝ふるよりほかはない。が、出来るだけ本文の言霊をその範囲で判明するやうに努めよう。さて、「高天原（高天原）神留坐」とある。その「高天原」とは、此の「天」は「アマ」だと古事記の訓ませてあるのをはじめてとして、世間では、「タカマガハラ」などとも訛つて居る。その読み方よりも、その解説はなほ更に雑多なものが行はれて居る。けれども、次ぎの文を見れば此の読み方も自ら判明するのである。

「皇親。神漏岐・神漏美乃命以豆」

「皇親」は、古来「スメムツ」とか「スメラガムツ」とか読んで居る。これは、「スメミオヤ」であり、「ミオヤ」で「オヤ」で、「隱身（ヒノカミ）」としての「神祖たる皇親」であつて、人間的の親子関係ではないから、「オヤ」「ミオヤ」「スメミオヤ」を妙用（ミハタラキ）の方面から「スメムツ」とも「スメラガムツ」とも読み、更に「スメラガムツミマスナル」と読んで、「カムロギ・カムロミ」の「命（オホセ）」と応ずべきことを明にしたのである。従つて、「皇祖」とは書かずに「皇親」と書く。それは、「スメラガムツミマスナル」「カムロギ・カムロミ」の「カムツマリイマシマス」「タカマノハラ」であるから、「皇親（スメミオヤ）」は即「神祖（ミオヤ）」ではあつても、時間を認めての過去の存在と云ふのではなく過今来に弥り四維十表を超えて常時不斷に顯靈二貫の活用として都べてを産み出すので、「祖」では誤解され易いために「親」とされたのである。則、「スメラガムツミマスナル」は、「カムロギ・カムロミ」を説明したものである。

時間と空間とを超えて大宇宙の御活用（ミハタラキ）を觀めまづれば「カムロギ・カムロミ」と称へまつるところの「オヤ」で、「スメラ」で、「ミオヤ」で、「スメミオヤ」で「スメラガムツミマスナル」で、躰の上から云へば「スメミ

ミイツ 循環図



觀門の見方

サキリ

空なる實在 ← 神の後威の二とて、極、極、無極、極、極大極小と表現

裏 ↓ 無宇宙

表 ↓ 全體

表の表 ↓ 大宇宙

裏の裏 ↓ 點

裏の表 ↓ 零

表の裏 ↓ 直日

表と裏と合わせると ↓ 二 ↓ 経 ↓ ◎ ↓ ◎ ↓ 三 ↓ 身 ↓ 一 ↓ ◎ ↓

火経身 ↓ 日 ↑ ↓ 完全圓成の宇宙である全體である

此のやうな國を高天原ととな
て日止と呼ぶのは、完全圖成
の宇宙である體であるとの義
がある。

ですから日止（ひと）と呼ぶ
は國家統治の全權であり完全
體なる上下である。

言ひ換へると、日本天皇を日
にして、日本天皇國を日止に
て高天原にして有道と云ふの
ある。

ひとみなは、なをことにして
れありと、かたみにぞしる
みのうけひて。

孟子曰。無恒産。而有恒心者
惟士爲能。若民則無恒産。因
之。是罔民也。

恒心。苟無恒心。放辟邪侈。
不爲曰。及陷於罪。然後從而
之。是罔民也。

マツリゴトとは國家の中心か
ら外郭に向つて油を供給するこ
とである。

其の供給された油を運用して
外郭から中心に還して行くのが
祭である。

それで、マツリゴトとマツリ
とは内と外と、上と下と、本と
末と、枝葉と根幹とが相互に交
流疎通する行事なので、相互に
表裏をなしつつ國家を治め、天
下を和ぐる妙用を現するのであ
る。

油とは比喩である。
猶太人が膏注ぎたるものと云
へる如く、油とは神の稜威であ
る。

それ故に又、水とも云ひ、火
とも云ひ、靈とも呼び、無とも
稱するので、極で、無極で、極
大で、極小で、物で、純男で、
同象女で、佛で、恵保婆で、閻
魔天で、必竟、空なる實在であ
る。

其の實在は裏から観れば無字

宙で、表から観れば體で、表
の表から観れば大宇宙で、裏の
裏から観れば點で、裏の表から
観れば零で、表の裏から観れば
直日で、表と裏とを合せて観れ
ば二で、経で、○で、○で、三
で、身で、一で、○で、火経身
で、日止で、人で、人間世界に
ほかならぬのである。

火入（ひと）と日止（ひと）
と人間世界との關係を簡単に説
明すれば如上である。

そのそのの、こころこころに
そのさまの、うつるをみれば
かみながらなる。

以上 昭和十四年五月十五日

山谷 識

ぎて、目眩み、耳聾するが如くにして、誤つて異端邪説の鬼窟に陥ることが多い。學者の特に留意せねばならぬところである。

第五、「陰陽合躰」。アメノミハシラクニノミハシラ先師の傳へた神事に、一つの印相が有る。それを、「天沼矛」だと教へられた。此

の「天沼矛」を以つて、大虚空を兩斷すると共に、大音聲を發する。此の音聲が、一線の光明と成つて、宇宙を貫き徹す。之は、氣吹戸主イフキドヌシの神事カミワザで、妖魔調伏の祕事である。此の一線の光明を發する主體は、我であるが、我の内に結ばれたる陰と陽との兩極が、其の活用を現はすので、此の神事の印相は、「天御柱・國御柱」を象徵したものである。合せては、「心之御柱」シンノミハシラクと稱へまつりて、ヒノカミ神の御座にてましますのである。

古事記だけでは、此のことが明瞭でないが、「伊邪那岐命伊邪那美命二柱神が、淤能碁呂嶋に、天沼矛を指し立てて、國の中の天御柱となされた」と、舊事紀に載せてあるので、古事記の本文を補ふことが出来る。之は、此の圖のとほり、ヒカリ◎である。其の、國と云へるは外廓で、フ◎であり、天御柱とは、中心の一點であると共に、國を統率したるものであるから、ヒカリ◎が即、天御柱だと云ふことになる。すると、之は同時に、國御柱で、天御柱で、心之御柱であるものが、伊邪那岐命伊邪那美命二柱神である。之を、「陰陽」と稱へまつりて、二柱の一柱で、極小としても、極大としても、共に、陰陽である。それは、陰と陽との二つであつて、そのままに、一つなのである。

物と云ふ物を、何のやうに分割しても、陰と陽との合体なので、又、何如に累積しても、陰と陽との合体である。之を、ヒカリ◎と稱へ、日神ヒノカミと白しまつるのである。幾度となく繰返して述べたやうに、日とは、二つの光で、ヒ◎である。メ◎と呼ぶところのヒ◎が、神人産出の胎であることは、「天成り、地定りて、高天原が出来た。高天原が出

來たので、神が産れた」と、古典にあるので判明する。それで、此の「天御柱・國御柱」を、化豎給ふは、祓禊の神事である。「化豎」の字を用ゐたのは、舊事紀であり、日本紀であるが、能く義理を傳へて居る。古事記のやうに、「見立」では、一寸、品物扱ひにされた感じがする。

第六、「悔改」は、○の神事と稱するので、經津魂の妙用で、布留倍の祕事で、經津主の祓で、經津主命の別名と傳へられたる齋大人の禊である。之に依つて、祓と云ひ、禊と呼ぶ神事は、相互に表裏を成しつつ、人天萬類を化育長養するの義であることを知らるるのである。

「二柱の神が、相互に約り竟へて、天御柱を廻りし時、伊邪那美命が、先に詞を掛けられたので、伊邪那岐命が、女人先言不良と詔せられた。けれども、そのままにして、お生みになられた御子は、良くなかつた。で、之を悔いて、共に、天神の御所に参り上り、天神の命を請ひまつる時に、天神の命に依りて、布斗麻邇爾ト相た。其のト相は、女先言不良との詔せである。依つて改めて、詔せの如くに、陰陽の位を正しくして、茲に、大八洲國が完成されたのである」

顧みよ。省みよ。汝の何物なるかを反省みよ。其處に道有り。其處に光有り。「光は神なりき」。其處に詞有り。「詞は神なりき」。之を「初發」と呼ぶ。

人天萬類が、天地と剖割き、陰陽と分別ち、神魔を審判して、一圓光明の○國を築くは、祓禊の神事の他には無いのである。

第七、「國嶋産出」とは、天成り、地定りたる曉なので、祓禊の結果として、一圓光明の大虚空を仰ぎたる時、それは、○であるから、太極とも呼び、小極とも云ひ、兩儀とも、陰陽とも、神とも、魔とも、空とも、實と

も、火とも、水とも、エホバとも、マヤとも、マリヤとも、アバイロンとも、ヤーマとも、母とも、父とも、天とも、地とも、無とも、有とも、無一物とも、物とも、理とも、點とも、線とも、面とも、零とも、一とも、二とも、三とも、五とも、十とも稱するので、一であるところの一切で、物無きの境地である。物は無いが、境地としての零界を保有するのである。で、之は、無の有と呼びて、位置のみ存るのである。

位置のみだと云ふのは、未、物を成さざるので、物と成るべき資料の存るのみである。其の資料に依つて、箇體を築くには、其の種子が無ければならぬ。其の種子を「し」と呼ぶのである。「し」とは、死であり、知であり、治であり、主であり、人であり、統治で、統率で、我である。此の種子は、其の初、唯一點としての位置を占めただけであるから、未、量に上らないのであるが、其の種子の萌騰出づる時、葦牙の如くであるとして、之を、「宇麻志阿斯訶備比古遲」と稱へて、「ほ」と呼ぶのである。訶備とは、穎の複數語で、萌えに萌えたる穗で、△である。△と圖示するのは、箇體發生の上から、等しく、箇體たる人類の便宜なので、○と畫くに等しいのである。故に、之を擴大し、説明を加へて、◆と描くも、※とするも、或は、⊗、又は、⊙、又或は、⊛と描きまつるも、共に等しく、△を種子とし、○を標識基準として、生れ出でたる相である。之を言ひ換へると、死と呼ぶところの零から、其の零を資料として、此の生を生ずるので、之を「しほ」と稱し、鹽とも、潮とも、汐とも書き、此の妙用を主る主體を鹽椎神と稱へまつり、其の創造せらるる状態を形容しては、「宇麻志阿斯訶備比古遲」と稱へ、内容を解説しては、「二柱祖神」「修理固成天沼矛」「天浮橋」「鹽固袁呂固袁呂」「淤能碁呂嶋」「天御柱」「八尋殿」「美斗能麻具波比」「布斗麻邇」「大八嶋國」と傳へたのである。

それは、大虚空に、一點を認めたる時、其の一點が、旋廻し統一して、箇體たる宇宙を築く。其の旋廻し統一

して、築き成したる宇宙は、布斗麻邇と稱する一圓相を標識基準として、不斷の活動を爲すので、事業としては、直毘大直毘神の稜威^{レウイ}を仰ぎて、失墜することなく、國土としての高天原を築き成せよとの、神の代の神の御教^{ミノリ}と拜承しまつるのである。

「しほ」の内容として、此に擧げた古典の詞は、神の詞であるから、そのまま、神であつて、また、その神徳の妙用を教へられたのである。が、之が委しき説明は、「言靈祕説」を待つことにしよう。

第八、「生^{マタカミヲモウミタマウ}神^{コトアマツカミ}」とは、別天神たる隱身の獨神^{カクリミ}が、八百萬の神を生み給ふので、「惠保婆^{エホバ}の神^{カミ}は、宇宙の外

に在りて、宇宙を造り給ふ」と云へるもので、「神の獨子たる基督を降し給ふ」と稱するもので、「伊邪那岐命伊

邪那美命二柱神は、別天神^{コトアマツカミ}たる獨神の陰陽で、それが、國嶋をも、國嶋を統治す主宰者^{カミ}をも、生み給ふので、二

柱神の共に生みませる嶋は、十四嶋^{トラアマリヨシマ}で、神は、三十五神^{ミシアマリイツハシラ}で、天地と分割きたる時、國嶋^{クニ}としては、高天原た

る境地で、神としては、高天原統治の日神^{ヒノカミ}で、天照大御神と稱へまつりて、三十五神^{ミシアマリイツハシラ}にてましますので、その

三十五神とは、波留比比咩^{ハルヒヒメ}と稱へまつる^{フタツノヒカリ}で、我期大君^{ワガオホキミ}にてましますので、國家としては、天皇^{スメラギミ}と稱へま

つり、人天萬類^{ナホヒ}としては、直日^{マラ}と謂しまつり、大虚空としては、二柱祖神^{フタハシラミオヤノカミ}と仰ぎまつるのである。此の二柱

祖神^{ミオヤノカミ}と稱へまつるは、生神^{ミコウミ}の妙用^{ミハタラキ}で、祓禊^{ミソギ}と白しまつるのである。

第九、「豫母都志許賣^{ヨモツシコノ}」は、如何にして生れたのか。日本紀には、泉津醜女と書き、極端に醜惡なる女と解釋してある。「伊邪那美命の命せをよそにして、伊邪那岐命の投げ棄てられた黒御鬘の蒲子を掀ひ食ひ、筍を抜き食ひなどした」とは記載して居るが、それだけでは、其の本質を明瞭にすることが出来ぬ。

「愛^{ウツク}しき我^アが那邇妹^{ナニモ}としての伊邪那美命を、一火^{ヒトツヒ}にて見給へば、宇土多加禮斗呂岐^{ウジタカレトロロギ}て、何に例へやうもなく

幸 81 頁 9 行目 ~ 13 行目

語句を補って、次のように解釈した方が良くと思う。

『イザナギイザナミが共に生んだのは 14 島・35 神である。

これは、特別の境地に到達してみれば（^{アマツ}天地と^{ヒツ}割割きたる時）
 （「このまゝこのまゝ高天原」と言うのと同じような意味で）

14 島はこのまゝ高天原たる境地であり

35 神はこのまゝ高天原統治の^{ヒノカミ}日神（天照大御神）である。

この35神はそれ自体としては、ハルヒヒメ という外郭だが、

この境地に到達してみれば、それはまた^{フナツノミヤ}（フナツノミヤ）という中心

（即ち、35神の親/本体であるイザナギイザナミ）である。

このイザナギイザナミと「二柱御祖神」と称する時は、

^{ミコウミ}ミコウミ ^{ミハツナキ}ミハツナキ
 こうした生神の妙用に着目してこう呼んでいるのである。

（^{ミヅ}みづから^{ミヅ}経となり、^{スミ}スミとなり、^ミ相交わり

新たな器体を形成する作用のこと。

無宇宙から宇宙を産み出す作用を象徴する神名が

アマノミヤ イザナギイザナミ フタハシラノミ である。

Chapter 74. 神国築成のためには、^マ○と^ミ○の抱合合体により、
何らかの「新たな箇件」を成立させることが必要である。

こうした「新たな箇件の成立」は、神話上では、^{ミコウミ}生神と
表現されており、

それを成す代表的な神格が、イザナギイザナミ であり、
フタハニラミオヤノカミ

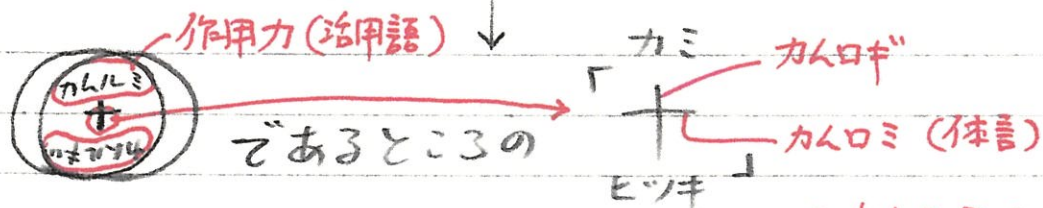
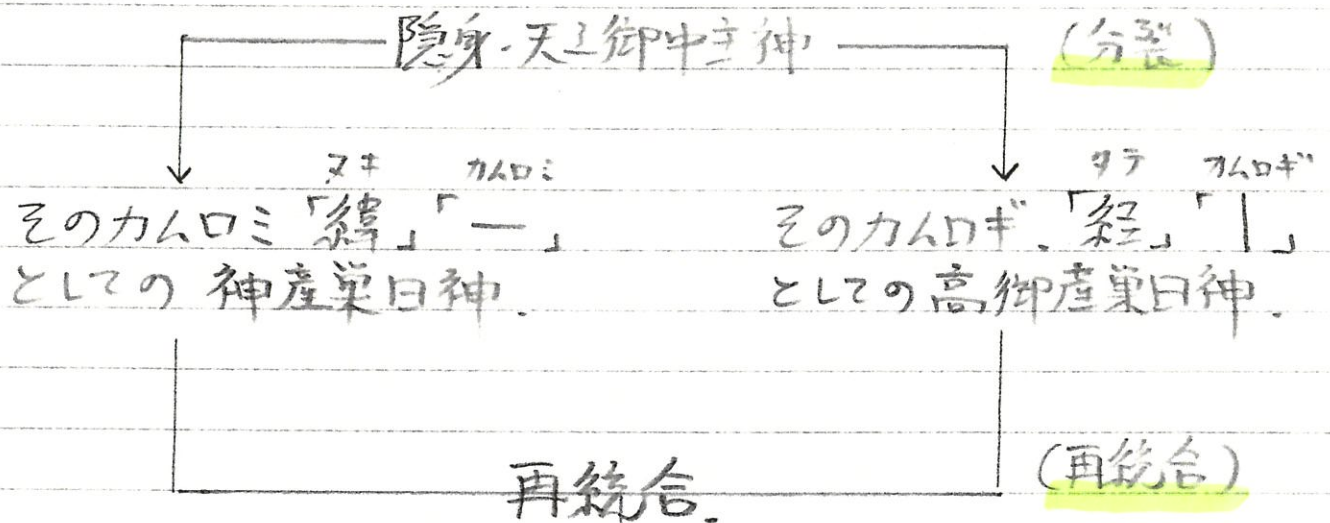
よって、この神名を唱えることそれ自体が、
神国築成を助ける力となる。

Chapter 81. 即ち、イザナギイザナミ（本来は「別天神たる隠身の狼神」）
が八百万の神を生み給うたのだから、
我々もまたそれに倣い、この神名を唱えることによって
新たな箇件を形成し、ひいては神国を築成するのである。

未来250頁の図「ヒノカミとしては」の説明。

未来230

『この「十」と結び結ぶ(元としての)隠身』



即ち、「ミオヤ」と称ふる「加徴」

・カムルミカムロギの作用力によって、カムロギとカムロミは正しく結合している。

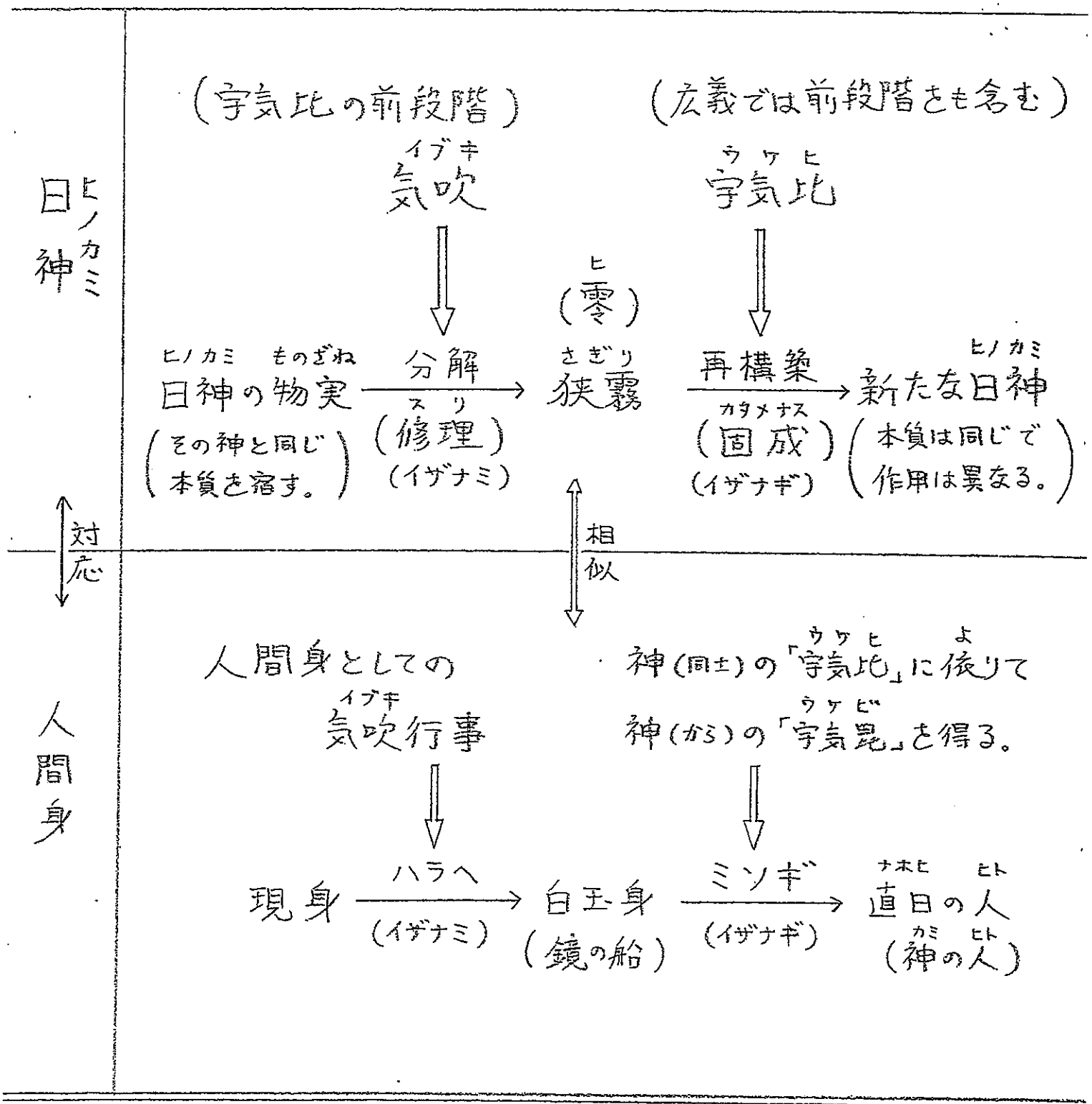
⇒天祖や日神を意味する。

典型的には(ヒノカミとしての)天照大御神

→ 基本的には『こうした「二つのもの」への分裂と

その再統合』というプロセスを経て、ヒノカミ→タマノカミ→ミノカミと「組み直されて」ゆくのである。

「イブキ」と「ウケヒ」



上段の用語は⑧149頁ほかより。

下段の用語は「日本民族の信仰」(-)より。

天祖の作用力を天照坐皇大御神と云う。

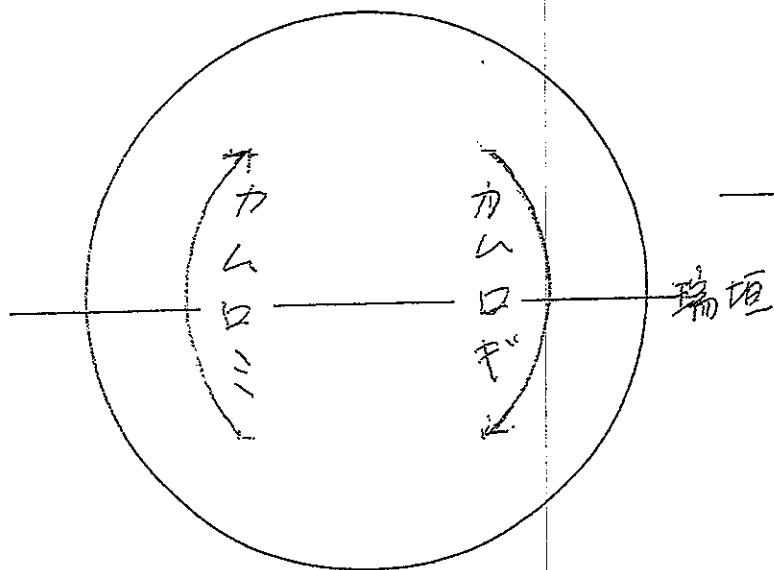
その作用力を二つに分ける場合

大宇宙を領域として分ける方法が二通りあるので、

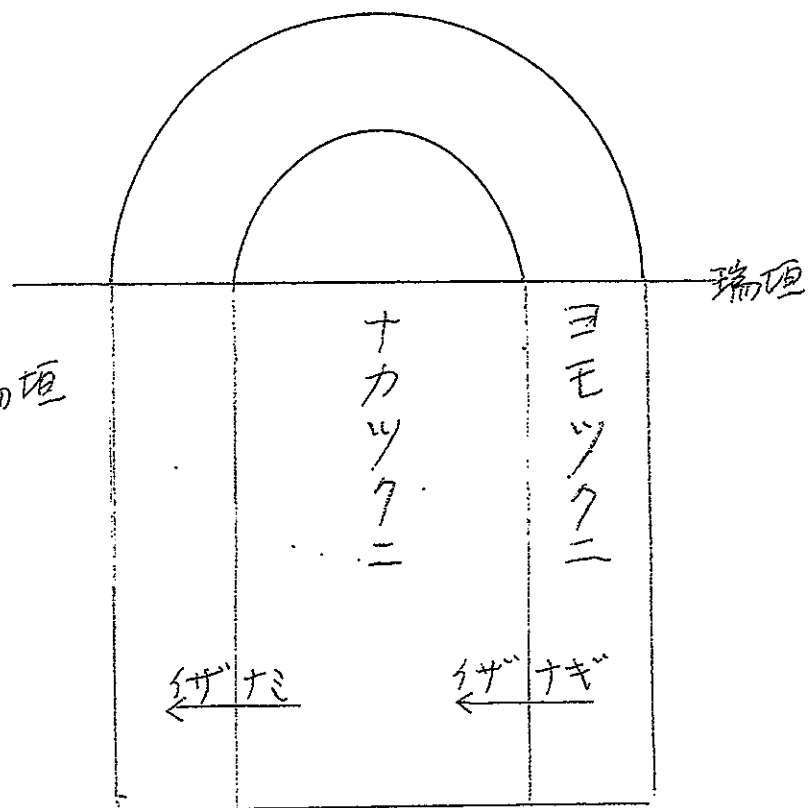
それに応じて、作用力の分け方も二通りあり、

それぞれに別個の神名が当てられている。

下
1. 上兼にわけ。



2. 内外に分ける。



／ 上から下へ カムロギ
＼ 下から上へ カムロミ

カタメナス
（ 外から内へ イザナギ
内から外へ スリイザナミ

アメユヅルヒ

クニユヅルヒ

の流行変転なるのみ。

また決して他奇有るにあらず。

一切の祭祀行事は悉皆此の事理に随ふ。

第十二問

材木を用ゐて人が家を建てることは誰にでもわかります。けれども、「マ」と「マ」とが、いかに運動し作用すれば新しきものが創造されるのか、無形なるが故にその状態は皆目わかりません。大きく言へば、曰く天地の創造、万物の出生、善意、悪意の発生、色彩の不思議、等々。

□答、

然り。然り。

此の間や大に好し。

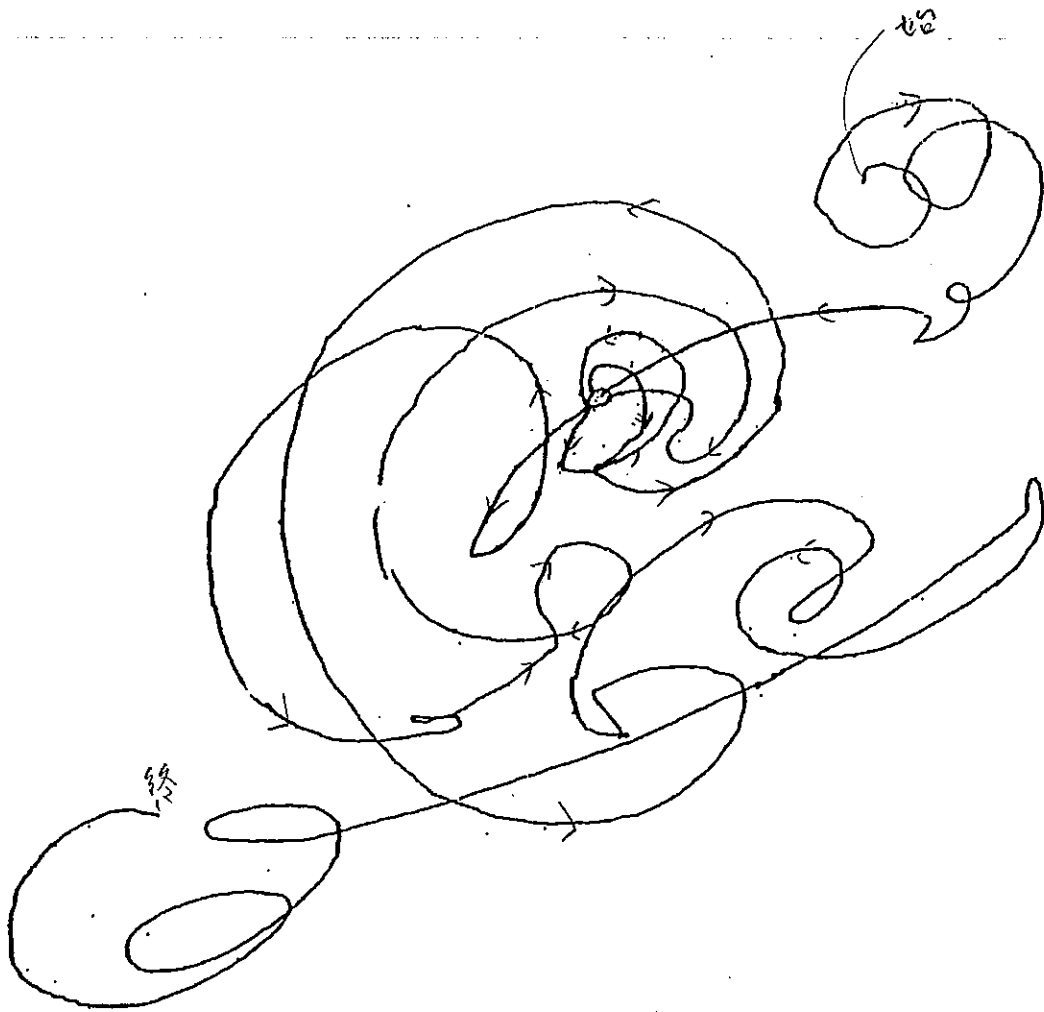
東西の古典、此の事理を伝へんとして古聖の心胆を碎けるを想ふ。

然れども、おそらくば、

日本古典の伝最詳密正確なるべし。

然れども、古典はその外観上よりは東西の各伝を対読せざるべからず。内観としては神伝を会せざるべからず。

変転しつつ 新なる一箇体成立す



変転しつつ 新なる一箇体成立す



「マ」の生滅起伏であるからには、その「カミ」の意志を無視して、人のみの意志の自由は成立しない。それ故に此の問には、「マ」自体の意志で、それが則、「カミ」の意志で、㊦の出没変転であると答へる。

第十五問、

先に簡体成立の活動状態を学んだのですが、崩壊滅尽の姿はいかがですか。

□答、

之レには、日本古典がそのまま良き答案である。先には、諸冊二神の「和合」に因つて、天地万有一切合三が成立した・生産された。ところが「火神」をお生みになったために、「火神」の出現に依つて、大悲劇が演ぜられ、ヨモツヒラサカの一線を境として、天界と地底・頭界神域と幽界魔境・極楽と地獄・とが湧出した。古記・書紀・等のアノ記述はマコトに精密であり確実である。その記述をそのまま簡単な形で書くならば、先づ火が出現する。その神の姿は、私どもの見慣れたところで、と書く。それが、四象と呼ばれる簡体品を焚滅ぼす。その状態は千態万様だが、いづれにしても、下向転落する。下向転落すると雖も、直線的ではない。上進展するにも、右旋左旋・左旋右旋・変転しつつ、完成せんとしたる如く、此の品は上に在りて、ま、と化する。と化しつつも、水火交錯、幾変転、遂に「空なる○」と成る。「成る」とは、「○なる一」である。

此の「○なる一」は、勿論、解体解脱の極で、「根之国・底之国之主」たる須佐之男大神である。

このスサノヲノオホカミに養ひ育てられて、大國主神は完成される。則、堅固大成の極で、「一なる○」のる。古典は之レを、伊邪諾岐大神神三貴子ハシラノウヅノミコだと伝へ、成り成りて、成り成りたるのる。